
孤独から救ってくれた君

深月姫季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独から救ってくれた君

【Nコード】

N1513P

【作者名】

深月姫季

【あらすじ】

流魂街で孤独な生活を送っていた一人の少年が、陽だまりのような幼馴染みと出会うまでのお話。

俺の住む西流魂街第一地区『潤林安』、そこは流魂街の中では最も安全と呼ばれている。死んだ人間は魂となり、その名の通り流魂街に流される。東西南北それぞれ八十地区、どこに振り分けられるかはランダム。数字が少ないほど治安が良い。噂でしか聞いたことは無いが、八十地区なんて人の住むところではないらしい。

それでも……俺はどこに居たって同じなんだ。

ここの住民は時には蔑むように、時には恐れるように俺の顔を見る。ばあちゃんの好物である甘納豆を買に行けば、追い払われるように商品を投げられ、道を歩けば『呪われた子』と囁かれる。この心の痛みを、誰が理解できるだろうか。

「ただいま」

「おかえり、冬獅郎や」

古くなつた引き戸を少し持ち上げながら引く。これはばあちゃんに教わった生活の知恵。ここに来てから親切にしてくれたのはばあちゃんが最初。ここでは現世で言う家族のような集合体を作って生活する。ただ違うのは、そこに血のつながりが無いことだ。白銀色の髪に琥珀色の瞳という異質な姿をした俺を受け入れてくれたのはただひとり、このばあちゃんだけだ。

「ほら、買ってきたよ」

座布団の上で正座してるばあちゃんの膝に、甘納豆の包みを落とす。

ばあちゃんはとても嬉しそうな顔をして、今日も俺に言うんだ。

「お食べ」

二人して熱い茶と甘納豆という少し渋いおやつタイムを過ごす。これは日課で、俺にとって何処に出掛けるよりも幸せな時間だ。

そんな小さな幸せを噛み締めていると、引き戸がガタガタと揺れた。俺より少し背の高い影が写る。ばあちゃんは腰が少し悪いら、自然と俺が席を立つ。

「開けるから、下がってな」

声を張ると驚いたように相手の影がピクリと揺れたが、相手は命ぜられるまま、一步下がった。

「こいつを開けるにはクセがいるんだよ」

引き戸越しに声を掛けながら、下の方を少しレールから浮かせながら滑らす。

訪ね人が誰だろうと、俺に怯えるに違いない。ため息混じりに引き戸を完全に開いたとき、俺は影だった人物に目を奪われた。

「お……女？」

“あそこには異形の者がいる”

そう言って近づかない大人が大半で、来客は大抵ばあちゃんの友達か、長老と相場が決まっていた。だが今、目の前にいるのは確かに少女で、まだ幼い。といっても、俺より年上か。

「あの、私」

少女は目をクルクルさせて年寄りと幼子しかいない家に首を傾げたが、直ぐに笑顔になった。

「隣に家族で越してきた、雛森です。ご挨拶に伺いました」

裏の無い、あたたかい陽だまりみたいな柔らかな笑み。俺の警戒心は直ぐに溶けた。雛森と名乗った少女は大きなスイカの網を持ち上げてみせ、ばあちゃんがゆっくりと立ち上がった。

「いらっしやい、よう来たね。冬獅郎、あがってもらったらええ」

少女はペコリとばあちゃんにお礼すると、俺を見た。

「冬獅郎くん……って言うの？」

「ああ」

「じゃあ、シロちゃんね！」

「は？」

嬉しそうに屈託ない満開の笑顔を見せる少女に戸惑う。この女、俺が怖くないのか？

「私はね、雛森 桃」

少女 桃が手を差し伸べた瞬間、俺の胸はトクリと鳴った。

「……バカ桃」

素直に名が呼べず、返した言葉は苦し紛れだったが、桃はそれでも笑っていた。

その日から、俺たちの長い付き合いが始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1513p/>

孤独から救ってくれた君

2010年11月26日20時42分発行